

「それでは、彼女への制裁を選択をしてください」

穏やかで、淡々とした男の人の声。姿は見えないのに、背中を強く押された気がした。

僕は、わずかに震える指先で空中に浮かぶ透明な画面に触れる。それだけなのに、すごく重たい動作に感じる。薄いガラスみたいな画面は、触れると僕の指先の持つ熱でうっすら曇り、点や線状の指跡がつくのが分かる。

——これは、夢のはず。それなのに、現実よりもリアルな実感があった。

「いやあだー！！来ないで、来るなっ！！…誰か助けてえっ！」

聞き覚えしかない声に、ハッとした。おずおず目を向けると、大画面に映し出されたOL風の女が、おびえた顔で叫んでいる。

ここまで必死で走ってきたせいで失くしたのか、靴を履いていない。たしか、エナメルのヒールを履いていたはず。カツカツ音がしていた。

SNSでは実名を公開していて、高そうなブランド物で着飾り、濃いメイクをして笑顔を作る。

僕に言わせれば、性格の悪さがにじみ出ている顔だ。わざわざ晒す気が知れない。

それが今、あの女の顔は恐怖で歪み、髪が乱れてぺったりと額に張り付いている。おまけに涙目だ。

逃げながら振り返ると、視線の先には2メートル近くありそうな浅黒い肌の男が1人。30代くらいで銀髪で、渋めのイケメンに見えなくもない。建設の現場関係か、裏社会で用心棒でもしてそんな感じだろうか。薄地のVネックシャツに、少しくたびれたズボン。胸が盛り上がり、腕が太い。筋骨隆々としているのが見てとれる。

男は口元に笑みを浮かべて平然としている。
そして逃げ惑う女との距離を早歩きで着実に縮めていく。

ついに袋小路に飛び込み、自ら逃げ場をなくした女の腕をがっしりと捕まえた。

僕は、その展開に思わず小さくガッツポーズしていた。

「触るなっ、やめろ！誰だよ？！キっっモ！！」

トーンダウンはしたものの、まだ諦めていないことが分かる声色。

僕は、たまらず見えない声に話しかけた。

「あの、僕。設定を追加したいです…」

「はい、为什么呢？」

「…あの女の声を、聞きたくない。それに顔も見たくないです」

「なるほど了解しました。では、オプションから選択してください」

「…？」

促されて、また画面に向き直って選択をしてゆく。
先程はなかったオプションの選択肢があった。

映像の向こうで、男はしばらく動作を止めていた。

それがおもむろに動き出すと、女性の口に布のようなものを押し当てた。

「ふゝえ？ …っ…」

もがいていた身体から急に力が抜け、ぐったりとなる。

男はにたりと歯を見せて笑いながら、意識をなくした女を後ろから手を回し抱いていた。

さらに、隠し持っていた目隠しを取り出し捕らえた獲物の目を覆う。

「これで、宜しいですか？」

姿のない声に確認されて、僕は頷く。まさにこういうことを求めていたから。

女の胸元へ伸ばされた男の手が、服越しにまさぐる。獣みたいに激しい、欲望そのままの手つきだった。

「っ… んゝ、んー…」

男の筋張った大きな手のなかで、ぐにぐにと揉みしだかれ、形を変える胸。

乳首が立ったのか、服越しに主張している。

その先端を太い指でぎゅうっ、と摘まれたあとはグリグリと押し込まれている。

あんなしごきかたをされたら、きっとすぐに腫れて黒ずんでしまうだろう。…いい気味だな、と内心想った。

意識をなくした女、麻美はさらに男の手でみるみるうちに裸に剥かれていく。

フリルシャツのボタンが飛び、黒色のタイトなひざ丈スカートをずるりと引きずり下ろされる。

濃い肌色のストッキングが裂ける音がした。

ゴテゴテとしたレース飾り付きの紫色のブラジャーも、グイグイと引っ張られて引きちぎられる。

乱雑に揉まれていた胸は赤みを帯び、乳首は色が薄いもののピンクというより赤茶色で、乳輪もけっこう大きい。

(あんな体型してたのか…腹の肉が余っててだらしない)

何も知らない人が見たら、スタイルが良いとか、気の毒になぜあんなことをされているのか？と思うだろう。

でも、僕にとっては麻美のすべてが醜く映る。
これまでの展開に、すでに後ろ暗い興奮すら覚えている。

場面が、いつしか室内に切り替わった。
小窓には黒いカーテン。壁はコンクリート打ちっぱなしで、所々に汚い落書きがある。狭い上に埃っぽそうで、床に放置されたマットレスもシミだらけで薄汚れて見える。

おまけに空調もついていないようで、男ははあはあと息をつき、額にはギラギラと汗が光る。

スタンドの白い照明が、ベッドに向けられ眩しいほどに照らしている。

男は麻美にのしかかり、興奮をあらわに太ももを撫でさする。首すじに腋、ヘソに顔を近づけては体臭を嗅ぎ、しつこくベロリと舐めあげる。

さっきまで全力で走っていたのだ。汗の味がするだろうと想像した。

麻美は声を出さないものの、時折ビクッと反応している。

僕はその光景の前で立ち尽くし、呆然となっていた。
正直見たいとは思っていなかった。でももう、目が離せない。

男の手は麻美の股間に伸び、ストッキングの裂け目を拵げた。
太く長い指が布の少ないショーツのクロッチ部分をつまみ、ヒモみたいに引き伸ばす。

少しゆるんだすき間から、指がズブッと秘孔に潜り込む。

麻美のそこは男の太くて長い指2本を飲み込んだ。

麻美の眉間にはシワが寄る。でも、…血がにじむ様子はない。

(…初めてなわけないか。あんなのが入るくらいだし)

この状況に慣れ始めた僕は、冷静にじっと観察していた。

すぐに感じやすいスポットを探り当てた2本の指が、ピストンみたいな動きをし始める。

グチュグチュ、ジュプ、グチュウッ！！

「あ、はっ♡♡うゝ…！」

麻美の顔も赤くなり、こめかみに汗がにじんでいるのが分かる。
熱にうかされたうわ言みたいに、小さく声を上げている。

卑猥な音をたてる股間からは愛液が垂れ出し、いくつものすじになって尻を伝えている。

侵入している指は、何と親指以外すべての4本に増えている。

麻美は身体をよじり、異物感をのがそうしてるようだった。が、そんなのはあの男の前ではムダな抵抗だ。

男は手マンに飽きたか、欲望が限界なのか。
慣れた手つきで手早くベルトを外し、ズボンをおろした。

ブルン、と取り出されたモノは、重力に逆らうみたいに上を向いている。
細い腕くらい太く、赤黒くて逞しい。
カリ高の先端はローションを塗りたくったみたいに濡れ、先走りが垂れている。

男は麻美の足首をつかんで、大きく開かせ、易々と股の間に陣取る。
肉茎は、長さが麻美の腹のあたりまで悠にあるようだった。

(あんな凶悪そうなのを挿れられるのか…)

興奮のせいか、思っていたより何も感じない。

男は、すっかり濡れてくば、と小さく開いている秘孔を指で捻げた。グ
ヂュ、という音がする。
すぐに肉茎をあてがうと、力強く腰を突き出した。

「んあゝ…！ お、ぐ…！！」

貫かれた麻美は苦しそうに眉を下げ、口から小さく声が漏れた。

男は肉茎がなじむのを待たず、激しいピストン運動で麻美のマンコの奥
まで突いている。
鷲掴みにされた胸は乳首が硬くなり立ち上がっていた。男が手を離すと、
赤く指の跡がついている。

激しい動きに翻弄されて、ゆさゆさっと胸が揺れる。

Dカップくらいはありそうだ。着やせしていたらしい。

こうしてみると、ただのAVをみている感覚にもなる。

麻美の顔はアイマスクで隠されているし、胸やスタイルだけはAV女優並みかもしれない。

浅黒い肌の男は恍惚の表情をして、肉茎を奥に押しつけ、グリグリと腰を回してナカをかき回す。

麻美は腰の下に手を差し込まれ、腰を反らせた体勢になっていた。より奥深くまで肉茎が届くようで、身体がビクビクしている。

さらに、回された男の両手で尻肉をしっかりとつかまれた。指の間からはみ出る肉。指が食い込んでいるのが分かる。窄まってヒクつく後ろの穴まで見えている。

それまで斜め上からだったアングルが、だんだん結合部に近づく。そして、そこが大映しになった。

僕は、それを食い入るように見ていた。

(僕を散々馬鹿にしてきたあのオンナが、自由を奪われてひどい目に遭わされている…！)

どす黒い感情しかない。けれど、愉しんでもいた。

ズンズンズンズンズンッ！！
グリッグリッグリッ！

規則的で、激しい律動。

麻美の身体は男に覆いかぶされ、男は真上から麻美の秘処に肉茎を突き刺し、力強く上下に動いている。

パチュン、パチュ、パチュンンッ！！

浅黒く毛深い尻肉と、麻美の丸い尻肉がこすれ合う。

麻美の尻は、肉茎に突いては引かれるのにあわせてゴム鞠みたいに跳ねている。

薄汚れたマットレスだけれど、スプリングだけはいいのだろう。

種付けプレスとか言われる体位だ。

あまり好きな体勢ではないけれど、惹きつけられている。

結合部からは白っぽい液体まで垂れていて、時間が経つにつれて白い泡みたいになる。

「う、わあ……」

僕は引いた。AVはそれなりに見ているけど、こんなハードなプレイは初めて見た。

男は、麻美の中で果てた。

ビュルルルーッ！！ブビュッッ！ビュククッ！

放出の反動か、小刻みに男の腰が揺れる。男は歯を見せてうすら笑い、一時だけ天井を向いていた。

射精したのは明らかだ。けれど、肉茎は依然として硬度を保っている。

チャイムの音が鳴ったのはどのくらい前だったか。
放課後、呼び出された場所へ行くと4人の女子がいた。
僕は折り重なった机や椅子の影になる教室の隅に追いやられた。

女子達は明るめの髪色で、容姿は比較的良い。

「お前なあ、ほんっと空気読めねえのかよ！」
「…っ、すみませ…」
「もっとだよ、もっと謝れ！」
「何で麻美がカンニングしたとかチクるんだよ、よりによって担任に」
「……」
「お前の見間違いなんだよ。どクズ眼鏡！マジ迷惑なんだけど」

僕は、麻美の前で深々と頭を下げる羽目になっていた。

悔しさしかない。でも、この教室に足を踏み入れて、この女たちと対峙した瞬間、こうでもしないと帰してもらえないと思った。

でも、麻美のカンニングは誰が何と言おうと事実だ。

1年後の受験を見据えた重要な模擬テスト。
担任がカンニング対策にと席をシャッフルしたため、たまたま麻美の隣の席で受けることになった。そして、僕は見てしまった。

迷った末に、覚悟をして担任の教師にカンニングを報告した。
担任は、麻美を呼び出して中途半端に説教でもしたのだろう。

(…なんで、僕の名前が麻美に知られてるんだよ。どうして?)

髪を掴まれ、引っ張られる。泣きたくなるくらい痛かった。
ピンタも飛んでくる。

床に這いつくばるよう言われて、従うと頭を踏みつけられた。

(絶対。絶対に、許さない……)

でも、僕にできたのは、また目をつけられないよう息を殺して振る舞うこと
だけ。

それでも麻美の虫の居所が悪いと呼び出されて散々に見下され、暴言を
吐かれるか暴力を受ける。

原因を作った担任教師は、気づいていながらいじめを黙認した。

切実に登校拒否したかった。けれど、僕の家には引きこまれる部屋もな
ければ、親の理解もありはしない。

進学だけを望みにひたすら耐えた。